

心の薬

2020. 7. 20

昨年の10月から12月まで、日曜日の夜に木村拓哉さんの主演で「グランメゾン東京」というテレビ番組が放映されていた。覚えている方も多いことだろう。

年が明けると、まるでドラマの展開に合わせたかのように、フランスのミシュランガイドで日本人初の3つ星を獲得した方が話題となった。パリのルーブル美術館近くに店を構えるレストランケイの小林圭シェフである。

ところが、フランスでも、そのわずか1ヶ月後に新型コロナウイルスの感染拡大により、飲食店の営業は禁止となった。最近になって店は約3ヶ月ぶりに営業を再開した。連日予約で満席の状態である。その一方で、パリのレストランは5%が閉店、30%が再開できずにいる。レストランケイも2ヶ月以上売り上げがない中、厳しい状況が続いたが、仲間が誰一人として欠けることはなかった。

「再開できた店には役割があるはずだ。我々は薬は作れないが、うちの料理を食べて体験してもらって心の薬の役割はできる。そこを目指そうということになった」と、小林さんは言う。

小林さんのお話を聞いて、悪い癖だが、教育に置き換えてしまった。教員も似ているのではなかろうか。やはり、薬は作れないが、心の薬の役割はできると思う。問題は、料理と体験の部分である。レストランケイでは、最高の素材を最高に美味しい瞬間に食してもらうため、一皿一皿に気を抜かない。

では、教育における最高の素材とは何か。最高に美味しい瞬間とは何か。それは、一人一人の生徒によって違うものであると考える。残念ながら、教員は、その生徒にとっての最高の素材、最高に美味しい瞬間を事前に知ることは、ほとんどない。だからこそ、料理において一皿一皿に気を抜かないのと同じように、教育における一瞬一瞬に手を抜くことはできない。

すなわち、常に全力で教育にあたらなくてはならない。そういった日々の努力の積み重ねから、生徒にとっての最高の素材、最高に美味しい瞬間が生まれてくる。教員は、医師であり、薬剤師でもある。処方箋を出し、薬を調合しなければならない。

そういえば、乃木坂46の歌に「心の薬」というものがあつた。歌詞を見てみると、「涙は心の薬」「笑顔は愛の処方箋」という内容である。これは、若い世代に合わせた秋元康さんの感性だろうか。

世の中には、素晴らしい料理に限らず、心の薬になり得るものがある。自然治癒もいいが、あまり無理をせずに、薬を服用したほうがいいときもある。そんなとき、自分にとっての「心の薬」があると、だいぶ楽になる。

フランス、パリにある三つ星レストラン、レストランケイ、そこには小林圭シェフの魂がある。日本以上に苦境に立たされているであろう状況ではあるが、ぜひ逆境を跳ね返してほしい。日本人ならではの繊細な感性が、きっと役に立つはずである。